

## 谷口仙花・その画業と人生

角田知扶

### はじめに

谷口仙花の作品を筆者が初めて見たのは、2010年のことである。作品を寄附したいので見に来て欲しいという連絡を受け、市内のあるお宅の庭先で、二曲一双の屏風をそっと開いてみた時の感動は忘れられない。楚々とした、それでいて意志の感じられるモダンな女性が、私を釘付けにした。屏風の裏には「船田仙花」と書かれており、その名前に聞き覚えはなかったが、美術館でお預かりすることにした。

谷口仙花、本名富美枝、戦前の日本画壇で活躍した画家である。働く女性やモダンガールを清雅な筆致で描き、新進気鋭の女流画家として大きな注目を浴びていた。2011(平成23)年、《春風婦女》【図1】は呉市立美術館で開催された「広島 日本画の系譜」展に呉市ゆかりの作家として特別出品された<sup>(1)</sup>。この時点では生没年も定かでなく、その経歴も多くが不明であったが、作品を見られた方から連絡が来るようになり、谷口の作品を所蔵する人物が現れた。谷口と面識もあったその人は、呉市に眠っていた作品を発掘するきっかけも作ってくれた。そしてもう一人、谷口に魅了されたのが、当時、中国新聞呉支社で美術を担当していたK記者である。取材を通して谷口の生きざまに興味を持ち、彼女とその周辺の人々を結びつけていくことになる<sup>(2)</sup>。こうして二人の協力者を得た筆者は、谷口仙花という謎に包まれた画家を探究していくことになった。

なお本稿は、『中国新聞』の「緑地帯」に掲載された筆者の「谷口仙花・その画業と人生」<sup>(3)</sup>を基に、これまで呉市で見つかった作品を中心として、彼女の経歴や代表作等について調査したことを整理し、加筆したものである。

### 1. 画壇デビューから青龍社脱退まで

谷口仙花は、1910(明治43)年8月2日東京に生まれた。関東大震災後の1924(大正13)年、埼玉県浦和市(現さいたま市)に転居。父・徳治郎は朝日新聞社写真部に勤務し、日本写真協会賞を受賞した経歴の持ち主。父の祖父・谷口藹山は、幕末から明治期に活躍した文人画家である。母セイは、京都の染物屋の娘で大変おしゃれな人であったようだ。日本の伝統に親しみつつ、ヨーロッパの新しい文化にも触れて育った谷口は、上村松園にあこがれて日本画家を志し、1928(昭和3)年女子美術学校(現女子美術大学)に入学する。在学中の1930年から川端龍子に師事し、第2回青龍社展に初出品、画壇へのデビューを飾ると、モダンな女性像を次々と発表して頭角を現していく。初出品の《麦秋》【図2】は、緋の着物で麦狩りをする女性を描いているが、農作業というよりは現代のグラビア写真のようだ。1931年に女子美を卒業した後、さらに文化学院美術部専修科で学び、1934年に卒業している。同年の第6回青龍社展に出品したのは、ドロップスの製造工場で働く女工たちを描いた《スキート工場》【図3】と、洋装和装の女性たちが闊歩する《舗道を行く》【図4】である。現在残されている図版はモノクロだが、色鮮やかなドロップスを缶詰にする白衣の女工たちが画家の色彩感覚を刺激したであろうことは想像に難くない。この年谷口は、「青龍社にあつては比較的后輩」<sup>(4)</sup>であったにもかかわらず「特にその取材を人物に採つて而かも時代感覚を解する」<sup>(5)</sup>と評価され、社友となっている。さらに1935年の第7回青龍社展で《装ふ人々》【図5】、翌年の第8回青龍社展で《海の憩ひ》《山の憩ひ》【図6】が連続してY氏賞を受賞する。《装ふ人々》は、古典を下敷きにした構成で<sup>(6)</sup>、身支度を調える等身大の女性

六人を六曲一隻の屏風に仕上げている。和装から洋装に着替える姿に世相を反映しつつ、日本女性の清楚な美しさを描いた本作は「この作は所謂美人画の形式以上に近代女性の自然な感情が抱へられてゐる。衣服の地質の触感の如きも良く出てゐる」<sup>(7)</sup>、「色彩の巧みな使ひわけによつて線の効果と同じやうな効果をなしてゐるのは、なかなか頭腦的にすぐれた仕事だ」<sup>(8)</sup>などと高く評価された。1936年の《海の憩ひ》《山の憩ひ》は六曲一双の大画面に、山荘で寛ぐモダンガールと、ビーチパラソルの並ぶ浜辺を水着で歩く女性を描いた大作である。「近代的な女性を此処まで書き出す作品は少い」<sup>(9)</sup>、「構図色彩ともに、出色のできである」<sup>(10)</sup>などと賞賛された。当時、女性たちの新しい風俗や華やかなファッションに注目したのは、もちろん谷口に限らないが、従来の美人画の枠を超え、意志を持って外に出ていく女性の「動的な美しさ」を描き出したところに、多くの人々は引きつけられたのであろう。自らも働く女性として生きようとした谷口は「それぞれの職場に生きて居る女性達の良さは、きつと仕事に打込んだ情熱の現れが美しい光を発散させるのであろう」<sup>(11)</sup>と信じ、絵の道に邁進していったのである。

瞬く間に成功への階段を駆け上がったかに見える谷口だが、1938年第6回春の青龍社展への出品を最後に、青龍社を脱退している。師・川端龍子への思慕と船田玉樹<sup>(12)</sup>との出会いが理由であったともいわれるが、真実は闇の中だ。だが、ここではあえて、後年彼女が米国の日系人向け同人雑誌『南加文芸』<sup>(13)</sup>に発表した自叙伝的小説「桃妖記」から読み解いてみたい。

「志乃の胸の内にあるのは他ならぬ師の青陽画伯なのである。…師は小さな女弟子に吾娘以上の愛情を注ぎ懇切をきわめて指導し、彼女の上に“有数の女流画家に”との夢をかけていた。志乃は師の愛情に答えて熱心に勉強している様に見えたが、いつか彼女は自分が本当に絵が好きで勉強しているのではなしに、師を喜ばせたい一心から熱心に描き続けているようになっていた。上達するためにはそれでも良いか知れないが、志乃の胸の中で、敬愛する師はいつの間にかこの世の唯一の男の姿に変わってしまっていたのである。」

「三十も間近かに迫ってきた頃の志乃は、次第に絵を描くことに疲れを覚え始めて、偉い女史などになって何の幸があらうかと思われ、彼女はもう画伯から絵を教える貰うのでなしに唯平凡な一人の女として愛されたくなくなっていた。」

「心ない世間の噂はそのような志乃を画伯の愛人と決めつけているらしく、それに腹を立てていた彼女は噂通りでないのが今はむしろ悲しいのであった。若い男たちはもう恐れて近寄らなくなっていたし、曾ての武蔵野乙女は武蔵野女史などと呼ばれて、それは畏敬と軽蔑の入り交った複雑な響きに聞こえるのであった。」

「女の画家として世間から褒められ注目されている志乃は、見物人達のはやし立てる中で否応なしに走らされている競馬の馬と同じように重過ぎる期待にもう息が続かぬ位に苦しくなっている。そして師が志乃へ注ぐ愛情は、過酷な程の鞭撻と変形してもっともっとと人々が驚く程の傑作を描かせようとする……」<sup>(14)</sup>

なんと赤裸々に語っていることか。「桃妖記」が小説である以上、創作が加えられている可能性も否定できないが、谷口は自ら「女の絵描きの未だ珍しい時代でもあったし、宣伝上手な青陽画伯の後ろ盾や親の七光りがあったから、早く世に出られた」<sup>(15)</sup>とも書いており、むしろすがすがしくもある。実際、この頃谷口は、歷程美術協会の活動等を通じて船田玉樹（「近頃半抽象画壇に頭角を現わし始めた若いK」）<sup>(16)</sup>と出会い、浦和の実家を出て、当時彼が住んでいた東京世田谷の住所近くに転居していることから考えても、『桃妖記』に書かれたことは、あながち間違いでもないだろう。さらに、谷口の興味深い作例もある。《海の憩ひ》《山の憩ひ》を発表する少し前、第4回春の青龍社展

で《ものぐるひ》【図7】という作品を発表している。青龍社展出品目録によれば、「お夏狂乱」を題材とし、「観劇の印象から作者の画心に再生した幻想を捉へての画因」<sup>(17)</sup>であるという。井原西鶴『好色五人女』のお夏は、手代の清十郎と駆け落ちするが失敗し、盗みの濡れ衣を着せられた清十郎が処刑されたことを知って狂乱する。筆者には、この《ものぐるひ》に、想う相手と結ばれぬ運命のお夏と、師龍子を想う故に苦しむ谷口の姿が重なって見えるのだ。自らの境遇を悲恋物語に重ねて描くというのはいささか感傷に過ぎるかも知れないが、お夏の物語と「桃妖記」を合わせて読むと、彼女のやり場のない気持ちが垣間見えて切なくなるのである。

## 2. 青龍社脱退後—船田玉樹との結婚と離婚、渡米まで

かくして青龍社を脱退した谷口は、歷程美術協会展やその研究会に出品を始める。雅号も本名の「富美枝」から「仙花」と変え、個展を中心として意欲的に作品を発表していく。だが青龍社という大きな後ろ盾を失った谷口に、世間は一転して厳しい目を向ける。1939年、銀座で開いた初めての個展では《湖畔の聖母》【図8】、《現代婦女十二ヶ月》【図9】などを発表するが、評判は芳しくなかった。「この作者は未だ師匠の膝下を離れるには早かつた」とか「青龍社時代多くの人から云はれたこの人の近代人的な感覚などは、それ程大袈裟に云はれる程のことではなく」、「甘い風俗画」であり、「その題材が当時多少新鮮に見えたといふだけ」<sup>(18)</sup>などと酷評される。翌年の第2回個展では、《梅を観る》《夏日幻想》《秋意》【図10】《山湖伝説》【図11】《小鳥と遊ぶ》《春風婦女》といった大作を発表して賛否両論の批評が寄せられる。「何かしら少女雑誌好みを想はせる、例へば、街をゆくリボンをつけた娘の様な、あぢけなさを受ける」<sup>(19)</sup>などという批判のある一方で、《春風婦女》は「絵画的効果からみて一番まとまつたよく整理された画面で洗練された美しさを雰囲気とした出来栄え」<sup>(20)</sup>とか、「清新な現代感覚と静謐な古典の精神がここでは何の身振りもなく渾融されてある。…(略)…これは特に見るべき尤作であつたと云ひ得ると思ふ。」<sup>(21)</sup>と評価もされた。青龍社流から脱し、自分らしい表現を模索する様子が見えてくる。

また谷口は1942年、その後の人生に大きな影響を与える能と出会い、新たな創作の源泉を得ている。喜多流の師について舞や謡を学び始め、能画個人展も開催<sup>(22)</sup>し、能についてまとめた自作の冊子『花扇』全二巻<sup>(23)</sup>も残している。能との出会いや稽古の覚書、能の鑑賞の記録、ともに稽古した人たちのこと、能画を描く難しさなどが、生き生きと描写されている。また1943年には、陸軍報道部指導の下に結成された「女流美術家奉公隊」に日本画家として参加するが、戦時色は日に日に濃くなり、やがて疎開を余儀なくされる。船田玉樹と結婚し、彼の郷里である広島県呉市に身を寄せた谷口は、終戦直前の1945年8月3日、長男を出産する。1947年には次男も授かるが、二人の幼子を育てながらの生活は苦しく、絵を描くどころではなかつたろう。この頃の遺族の証言によれば、谷口が絵を描いている記憶はなく、能や謡の稽古か、裁縫の内職をしていることが多かったという。そんな多忙な日々の中でも1946年には新憲法公布記念絵画公募展<sup>(24)</sup>で知事賞、1948年には第3回呉市美展<sup>(25)</sup>で市長賞を受賞している。1949年から始まった広島県美展<sup>(26)</sup>では夫婦で日本画の審査員を務め、1951年には広島で能画の個展<sup>(27)</sup>も開催した。地元の中国新聞社に能に関する記事を投稿<sup>(28)</sup>し、夫や地元の仲間たちと展覧会を開催<sup>(29)</sup>するなど、芸術に対する情熱が途絶えることはなかつた。

ところで1944年の秋、船田の故郷・呉市に疎開した谷口は、第2回個展の出品作を持ってきていたようだ。後年、谷口が知人に宛てた手紙によれば、5点の屏風を市内のあるお宅に預けたとある。おそらく《夏日幻想》《秋意》《山湖伝説》《春風婦女》《小鳥と遊ぶ》であろう。このうちの3点が呉市で発見されている。中でも《秋意》は数奇な

運命をたどった。元の持ち主が捨てようとしていたのを、見かねて持ち帰った人がいたのだ。雨漏りや害虫の影響により危機的な状況で見つかったが、現代の修復技術によりよみがえった。戦禍をくぐり抜け、70年以上の時を経て、谷口の作品が呉市立美術館に収蔵されたことは感慨深い。

1953年、中央画壇への復帰を望む谷口と、故郷に執着する船田との間で亀裂が生じる。谷口が呉へ来た頃、東京から有名な絵描きが来たとうわさになるほど彼女の名は知られていたようで、夫婦間に微妙な感情が生まれていたのかもしれない。谷口には、将来を嘱望された夫を地方で埋もれさせたくないとの思いもあったようだが<sup>(30)</sup>、船田は決して首を縦に振らず、家に帰ってこない日が多くなっていったという。二人を東京へ呼び戻すため「玉樹富美枝後援画会」なるものが結成され、親交のあった者たちが上京を呼びかける寄せ書きも作成された<sup>(31)</sup>が、二人はついに離婚に至る。谷口は二人の子どもを置いて、実家のあった浦和（現さいたま市）に戻っていった。

子どもと別れた谷口的心情を、ここで推測するのは適切ではないだろう。どのような事情があったにせよ、望んで我が子を手放す母親はいないし、寂しさを紛らわすため絵の道に打ち込もうとする心情も理解できる。かくして10年ぶりに中央画壇へ復帰した谷口の評判はどうであったか。かつてはちやほやしてくれた人たちも、手のひらを返したように冷たい。それでも、女流画家協会、全日本画人連盟の会員となり、1955年の第6回画人展では、能を題材とした抽象的な作品を発表する<sup>(32)</sup>など、精力的な活動が見て取れる。だが、日々の暮らしはどうか成り立っても、以前のような活躍の場はなく、将来への希望が持てずにいた頃、彼女に転機が訪れる。知人の紹介で米国籍の梅村重蔵との再婚話が持ち上がったのだ。渡米前、新聞社のインタビューで谷口は、「向うへいったらアメリカ婦人に日本画を広めよう」「前の夫のところに残した子供が大きくなったらアメリカへ呼んでやろう」<sup>(33)</sup>と語っている。「アメリカだとかえって新しい境地が開けそうで楽しみ」<sup>(34)</sup>との期待を抱いて渡米するが、新天地ソルトレイクでの生活は理想とはかけ離れたものだったようだ。言葉の壁や習慣の違いに加え、日本画はもちろん、着物をはじめとする日本の風習はすべて否定され、日本人を見下す夫の姿勢は、耐えがたい屈辱だったに違いない。ついに谷口は再婚相手の家を飛び出し、二度と戻ることはなかった。

### 3. 渡米後—『南加文芸』から読み解く谷口の足跡

梅村と離婚した谷口は、日本に戻らず、そのまま米国に留まる。一時帰国し、知人たちにも会ったようだが、実家が既に人手に渡り、帰る場所がなかったことも一因かもしれない。単身ロサンゼルスに移住し、ウェイトレスや家庭教師、お針子などなりふり構わず働いた。身寄りのない異国の地で、人種的な差別に耐えながら女一人で生活する苦労は想像するに余りあるが、持ち前の明るさとバイタリティーで荒波を渡っていくのが谷口だ。お針子として働いた経験は、『南加文芸』に掲載された創作「お針子たち」<sup>(35)</sup>や「裁ち屑を着る」<sup>(36)</sup>などに詳しく描写されており、非常に興味深い。

谷口仙花は、執筆活動も積極的に行っていたことが知られている。ライフワークであった能の新聞への投稿は、渡米後も続けられた<sup>(37)</sup>。前述の通り、1967年から1975年まで『南加文芸』にも「谷口ふみえ」や「香月瓔子」の名前で10回にわたって小説を発表している。登場人物の名を変え、創作の形をとっているものの、彼女の自伝的小説とみていいだろう。先に引用した「桃妖記」には川端龍子や船田玉樹とのことが、また「グレイハンド・バス」<sup>(38)</sup>では、主人公・まやが、ニューヨークへ向かうグレイハンド・バスの中で自らの生涯を振り返る形で書かれている。恋愛、出産、離婚、再婚の失敗と家出と続く物語は、そのまま谷口の人生と重なる。日本に残してきた息子達への思いを

綴るくんだり、彼女の心情そのものであろう。谷口は、執筆を通して自らを客観的に見つめ、他者への理解を深めていこうとしたのではないだろうか。『南加文芸』の中で、かつて自分を蔑んだ米国の夫に対し、祖国を否定することで海外生活の労苦を支えていたのだらうと述懐している<sup>(39)</sup>。

渡米後の谷口仙花の消息については、長らく不明であった。2012年、呉市内で谷口の作品《山湖伝説》が発見されたという記事<sup>(40)</sup>が中国新聞に掲載されたことをきっかけに、事態は急展開を見せた。ロサンゼルスで日系人向けに新聞を発行している羅府新報社を通じて、谷口が投稿していた『南加文芸』の元編集員を、遺族が突き止めたのだ。谷口が亡くなる前、自分の遺品を友人に託していたことも判明した。友人は2009年に亡くなり、その息子も間もなく他界したが、息子の妻が遺品を大切に保管していたのだ。こうして、渡米後の谷口の足跡は少しずつ明らかになってきたのである。遺品の中には、谷口の学生時代の習作や戦前のものと思われる美人画のほか、能についてまとめた自作の冊子『花扇』などがあった。『花扇』第2巻の巻末には次のように記されている。「子供達がいつか大きくなった時、これを見て母の心を想うてくれたら幸である」と。ロサンゼルスにある高野山米国別院に、谷口の仏画3点【図12】が納められていることも分かった。谷口の死後、その作品を預かっていた友人が平和への願いを込めて寄附したのだという。幼子を抱き微笑む天女の姿に、我が子への思いを込めたのだらうか。船田玉樹の元に残した子供たちを、こっそり近所まで見に行き、元気なようで安心したと、知人への手紙に書いたこともあった。谷口が我が子に対し抱き続けてきた思いは、死後11年の歳月を経て、海を越え、ついに長男の元に届いたのであった<sup>(41)</sup>。

最後に、まだ断片的な情報ではあるが、現時点でわかっていることを書き留めておく。谷口の『南加文芸』への初投稿は、1967年3月の第4号「露台にて」である。一緒に暮らす夫とのつつまじやかな生活を書いたこの小説は、おそらく米国で出会った新しいパートナーのことを書いている。

「彼は帰米で長い間米国で、私は日本で、それぞれの曲折の道をあゆんで来ました。…人生の半ばも過ぎてからやっと出会った二人でした。性格は全然反対なのですが何十年も昔から一緒に暮して来た肉親のように気心が合うのです。」

「新参者の私の身に沁みたのは、この広い大陸で、そして新しい国に生活して居ながら、小さな殻をしっかりと作って生きねばならぬ日系人社会の中の女性の宿命の悲しさでありました。」

「こんな風な異国での旅にもまれる女給姿から、ほんとうの私を見抜いてくれたのは唯一人のガーデナーさんでした。私は彼が独自の背骨バックボーンを持ち乍らも黙々と庭仕事をしていることや、世間の多くの人達が長いものに巻かれて他人の尺度で物事を判断しがちのあの横着さを持たず、自分自身の確固たる眼でものを見るひたむきな生活態度に強く惹かれました。…温室育ちだった私はこうしてこの大陸の一点に根を下ろすことが出来ました。今はもうどんな荒地でも平気なバミューダ草のように強靱に生きて行かれそうです。」<sup>(42)</sup>

彼の名は糠谷謙二といい、親戚に宛てた手紙の中でも時々出てくる名前である。彼については「米国生れですが幼い頃から静岡で育ち東京でも暮して居ましたのでやはり日本のものがなつかしいのです。」とか「一緒に暮しています謙二も痩身ながらまだ弱りもせずの良い話し相手ですから忙しいようなのん気なような毎日を送っています」などと記している。「おそらく私の一生のうちで今ほど気らくで気ままな気持ちで暮らした

事はないでせう」と述べていることから、激動の人生の中で、ようやく手に入れた平穏な暮らしであったことが推察できる。

しかし、この後日本の親戚とは音信が途絶え、空白の時間が過ぎていく。1995年に糠谷が死去し、その翌年、ロサンゼルスの日系高齢者施設「敬老リタイアメントホーム」に入居した事がわかっている。そして驚くべき事に、2000（平成12）年にはコメディ映画「Bubble Boy」<sup>(43)</sup>に着物を着た日本人女性役で出演を果たす。施設では日本の歌を歌い、見学に訪れる人とも良く話をし、日本を懐かしがっていたという。90才という高齢となっても、さまざまなことに興味を示し、自ら行動する女性だったと、施設長は述懐している。2001年8月11日、91才でその生涯を閉じた谷口仙花は、ロサンゼルス共同墓地で静かに眠っている。

## おわりに

谷口の長男・富士男の記憶によると、船田玉樹との間に問題があったような時でも、悲しい顔を見せたり、感情的になったりすることはなかったという。近所の子をかわいがり、彼女らをモデルにした小品も見つかっている。自宅で能の舞や謡を教え、書道や刺繍も賞を取るほどの腕前だった。才能とバイタリティーにあふれた谷口が、恵まれた環境にあったとしたら、どんな作品を残したであろうかと、その波瀾万丈の人生に思いをはせる。

2015年に開催した「谷口仙花と船田玉樹」展<sup>(44)</sup>を準備している時期、次々に不思議な出来事が起こった。谷口の資料を読んでいると、必ず彼女に関する事件が起こるのである。遺族からの電話や研究者からのメール、行方不明だった谷口の代表作を所蔵するコレクターから連絡があったのもこのときだ。まるで、谷口があの世界で采配しているようであった。展覧会が始まると、これまで面識のなかった谷口の関係者や、谷口を研究する者たちが一堂に会する機会までもが得られた<sup>(45)</sup>のである。

多くの人々の手によって、谷口仙花の全貌とまではいかないまでも、ぼんやりとした全体像が見えるようになってきた。谷口の青龍社時代の代表作は、東京の目黒雅叙園美術館に収蔵されていたが、美術館は2002年に閉鎖、所蔵品の多くは散逸してしまった。2015年になって《装ふ人々》がアメリカの日本美術コレクターに、第9回青龍社展出品作の《高原に展く》【図13】がカンザス大学の美術館に収蔵されていることが判明した。海外流出は残念だが、所在が確認できたのは喜ばしいことである。しかしまだ、渡米後の足跡は断片的であるし、戦前の作品の多くは所在不明のまま。現存する作品の調査も継続していかねばならない。

1938（昭和13）年に美術雑誌『アトリエ』に発表した随筆の中で、谷口は「私はいつか総てのものを次々に絵巻物にでも描いてみたい。新女性職人尽しと云つた様なものを」<sup>(46)</sup>と述べている。それは、代表作《装ふ人々》を超える傑作への構想ではないだろうか。「今の此の世相、混沌とした現社会に棲息する難しい新女性の面目を、従来のままの絵具や絹や技法で果して現せるものか心配で仕方がない」とも書いている。キャンバスに岩絵具で洋画風に描いた美人画が最近見つかった。谷口仙花を追う旅は、まだ始まったばかりだ。

（呉市立美術館学芸員）

## 〔註〕

- (1) 呉市立美術館の展覧会図録『広島 日本画の系譜』(2011.10.8-11.6), 呉市立美術館, 2011年を参照。
- (2) これまでの谷口に関する作品発見の経緯は、『中国新聞』の以下の記事を参照。「船田玉樹・谷口仙花の日本画 3点, 呉市立美術館に寄託」2012年1月31日朝刊:「谷口仙花の日本画「帰国」, 呉で一時生活「知られざる画家」2012年6月6日朝刊:「谷口仙花びょうぶ絵現存, 戦前作 呉の個人宅」2012年7月10日:「中央画壇 熱望の寄せ書き, 呉の船田玉樹・谷口仙花に上京願う」2013年2月5日朝刊:「谷口仙花の生涯, 芸術の道に生きて(上中下)」2013年2月5-7日朝刊:「谷口仙花の能画など寄贈 広島・富永さん 呉・松原さん」2015年9月19日朝刊。  
本稿を描くにあたり, 船田富士男氏及び, 大阪大学の北原恵氏には貴重な資料と情報を提供していただいた。記して感謝申し上げます。
- (3) 角田知扶「谷口仙花・その画業と人生」『中国新聞』緑地帯, 2015年3月25日~4月3日。
- (4)(5) 「社人、社友、社子の推挙」『近代日本アート・カタログ・コレクション 084 青龍社』第1巻, ゆまに書房, 2007年, p.383.
- (6) 「三重県立美術館ホームページ <http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/index.shtm>」, 「佐藤美貴『日本画家たちの視線 - 1930年代の日本画について -』 [http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/catalogue/1930\\_nihonbi/sato.htm](http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/catalogue/1930_nihonbi/sato.htm)」(2015年11月6日)に《婦女遊楽図屏風(松浦屏風)》(大和文華館所蔵)との関連が指摘されている。
- (7) 川路柳虹「青龍社の作者」『近代日本アート・カタログ・コレクション 084 青龍社』第1巻, ゆまに書房, 2007年, p.488.
- (8) 横川毅一郎「院展と青龍社」『アトリエ』第12巻10号, アトリエ社, 1935年10月, p.47.
- (9)(10) 谷口の第8回青龍社展出品作《海の憩ひ》《山の憩ひ》については、『塔影』(第12巻10号, 1936年10月)が主要な新聞批評を採録しており, (9)は『塔影』から引用した萬朝報評, (10)は名古屋新聞評である。
- (11) 谷口富美枝「女性風俗に寄せて」『アトリエ』第15巻9号, アトリエ社, 1938年7月, p.48.
- (12) 船田玉樹(1912-1991)は呉市出身の日本画家。本名信夫。1932年上京し, 番衆技塾に入り油彩画を学ぶ。のち日本画に転向し, 速水御舟, 小林古徑に師事。院展に出品しながら1937年頃から数多くの展覧会で前衛的な作品を発表する。1938年, 岩橋英遠らと歴程美術協会を結成するが翌年脱退。戦後は郷里広島に留まり, 院展や新興美術院展に出品する一方で, 個展を中心に実験的な作品を発表, 日本画の可能性を追求し続けた。谷口仙花とは1944年に結婚, 長男, 次男をもうけた。1953年協議離婚。
- (13) 『南加文芸』は1965年から1986年までアメリカで出版され, 最も長く続いた日系人による日本語同人文芸雑誌(1985年廃刊)。谷口は「谷口ふみえ」と「香月瓊子」の名で, 1967年から1975年にかけて全10回にわたって小説を投稿した。
- (14) 香月瓊子「桃妖記」『南加文芸』第19号, 南加文芸社, 1974年9月, pp.20-21.
- (15) 前掲, 香月「桃妖記」, p.20.
- (16) 前掲, 香月「桃妖記」, p.22.
- (17) 「出品解説」(春の青龍社第4回展覧会出品目録)『近代日本アート・カタログ・コレクション 084 青龍社』第2巻, ゆまに書房, 2007年, p.435.
- (18) 三輪鄰「谷口富美枝氏第一回個展」『塔影』第15巻7号, 塔影社, 1939年7月, pp.60-62.
- (19) 「谷口富美枝展」『美之國』第16巻7号, 美之國社, 1940年7月, p.45.
- (20) 「谷口富美枝氏第二回個展」『詩と美術』第2巻6号, 詩と美術社, 1940年7月, p.88.

- (21) 三輪鄰「谷口富美枝氏第二回個展」『塔影』第16巻8号, 塔影社, 1940年8月, p.64.
- (22) 谷口仙花『花扇』第一巻の奥付によると, 「第一回能画個人展」は1942年10月下旬, 東京・銀座松坂屋で開催され, 《羽衣》《三井寺》《湯谷》《半蔀》《松風》《枕慈童》《是界》《巻絹》《鬼界島》《景清》《班女》《黒塚》《頼政》の13点が出品された。
- (23) 前掲『花扇』第二巻の末尾には, 「第三巻の草稿だけは出来ていたが, 本にまとめるには至らぬまま, 田舎へあわただしく疎開せねばならなくなった。そして草稿も見失ひ, 私のお能の夢も見失った。この本もいっそ灰にしてしまひたかったが重要品の中に入れて奥深く藏つて置いた。子供達がいつか大きくなつた時, これを見て母の心を想うてくれたら幸である。」と記されている。
- (24) 新憲法公布記念絵画公募展は, 広島県, 広島市, 広島アテニウム協会, 中国新聞社の主催により, 1946年12月7日~14日, 広島市庁舎議事堂で開催された。
- (25) 『呉美術協会創立60周年記念誌 美術くれ』によれば, 呉市の美術の高揚と美術愛好者の技術向上をはかるものとして1946年に呉美術協会が発足。1947年に第1回市美展(5月29日~6月2日), 第2回市美展(11月1日~4日)が蜂の巣百貨店, 1948年の第3回市美展(11月1日~4日)は美多見商事で開催された。1949年には呉市公民館が落成, この年の第4回市美展(11月1日~4日)から呉市公民館で開催されることとなった(1960年まで)。1960年, 市庁舎と市民会館建設のため公民館が解体され, 市美展は一時中断。1963年の第18回市美展より再開。
- (26) 戦時中に中断されていた広島県美展が復活する形で, 「第1回広島美術展覧会」として再発足した。広島県, 広島市, 広島県教育委員会, 広島美術家協会, 中国新聞社の主催により, 6月23日~7月3日, 福屋百貨店で開催された。谷口仙花と船田玉樹夫妻は第1回展から第5回展まで審査員を務めた。
- (27) 船田仙花「能に題す」展は瑠安会, 桃鳩会の主催により, 3月17日~19日, ピカソ画廊で開催され, 《湯谷》《道成寺》など10余点が展示された。
- (28) 船田仙花「能の魅惑」『中国新聞』1951年2月28日。このほか, 「春季大能会 鉢木 黒塚を見て」という記事も確認されている(掲載年月日不明)。
- (29) 筆者の手元には「呉市制五十周年記念 第二回 七彩会絵画展覧会目録」(主催: 船田画室友の会, 1952年10月24日~26日, 呉市公民館会議室)がある。第一回展も開催されたはずだが, 現在詳細は不明。
- (30) 「桃妖記」では, 結婚に敗れ東京に戻ってきた主人公(志乃)が, 別れた夫について次のように語っている。「昔の彼は次代の画壇を牛耳る野望に燃えた画青年で将来を保証された鳳雛と評され, 彼女は彼のその心意気や若さに陰ながら惚れ込んでいたからこそあの山の湖で彼と一緒にいる決心もつき, 自分が描くよりも男に望みをかけて貧しい暮しと戦って尽して来たのだった。その彼の才能を地方面壇のボスなどで埋れさせたくない志乃が東京行きの話を持ち出すと, 「一人で行けばいい。東京にはあなたを待つ男たちがいる」と冷やかに言い, 妻が東京へ戻りたがると青陽画伯夫人が空襲で亡くなられた事を結びつけて暗い顔になるのだった。」(pp.24-25.)
- (31) (2)の「中央画壇 熱望の寄せ書き, 呉の船田玉樹・谷口仙花に上京願う」『中国新聞』2013年2月5日朝刊の記事に詳しい。
- (32) 「第6回画人展 陳列目録」(1955年5月4日~17日, 東京都立美術館)によると《能の幻想(A)黒塚》《能の幻想(B)楊貴妃》《能の幻想(C)一角仙》《能の幻想(D)羽衣》《能の幻想(E)是界》《能の幻想(F)猩々》《能の幻想(G)山姥》《古典の夢(A)》《古典の夢(B)》《古典の夢(C)》《作品 C》《作品》《作品(A)》《観音》《母子》の15点を谷口フミエの名で出品している。
- (33) 「新生活を求めて 谷口富美枝さん再婚して渡米」『毎日新聞』1955年7月4日朝刊。
- (34) 前掲, 「新生活を求めて 谷口富美枝さん再婚して渡米」『毎日新聞』の記事。

- (35) 香月瓊子「お針子たち」『南加文芸』第18号, 南加文芸社, 1974年3月, pp.2-29.
- (36) 谷口ふみえ「裁ち屑を着る」『南加文芸』第16号, 南加文芸社, 1973年3月, pp.80-87.
- (37) 谷口ふみえ「喜多六平太師の演能」『羅府新報』1972年9月29日5面。
- (38) 谷口ふみえ「グレイハンド・バス(一)」『南加文芸』第5号, 南加文芸社, 1967年9月, pp.99-110: 谷口ふみえ「グレイハンド・バス(二)」『南加文芸』第6号, 南加文芸社, 1968年3月, pp.96-110: 谷口ふみえ「グレイハウンド・バス(三)」『南加文芸』第7号, 南加文芸社, 1968年9月, pp.106-120.
- (39) 前掲, 谷口「グレイハンド・バス(一)」, p.110.
- (40) (2)の「船田玉樹・谷口仙花の日本画3点, 呉市立美術館に寄託」2012年1月31日朝刊。
- (41) (2)の「谷口仙花の日本画「帰国」, 呉で一時生活「知られざる画家」2012年6月6日朝刊の記事参照。
- (42) 谷口ふみえ「露台にて」『南加文芸』第4号, 南加文芸社, 1967年3月, pp.64-66.
- (43) ブレア・ヘイズ監督「Bubble Boy」(映画), アメリカ, 2001年。免疫がなく無菌室でしか生きられない青年が, 愛する人と結婚するために巻き起こす奇想天外な出来事と, 人々との交流を描いたコメディ。谷口仙花はラストシーン近くに数秒間出演している。
- (44) 「平成26年度コレクション展Ⅲ 谷口仙花と船田玉樹」展, 呉市立美術館, 2015年2月6日~3月29日。
- (45) 「呉で活動 谷口仙花の画業は 市立美術館 学芸員や次男が研究会」『中国新聞』2015年2月25日朝刊の記事に詳しい。
- (46) 前掲, 谷口「女性風俗に寄せて」pp.48-49。

[参考文献]

北原恵「“モダン”と“伝統”を生きる日本画家・谷口富美枝(1910-2001)」『待兼山論叢第48号 日本学篇』, 2014年12月

[図版]



(図1)

谷口仙花《春風婦女》1940年 第2回個展



(図2)

谷口富美枝《麦秋》1930年  
第2回青龍社展



(図3)

谷口富美枝《スウィート工場》  
1934年 第6回青龍社展



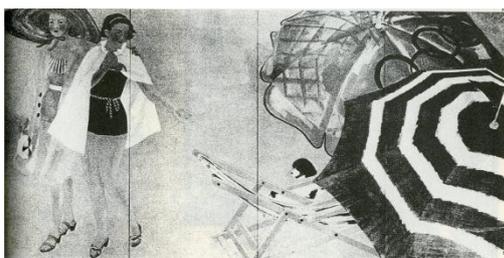
(図4)

谷口富美枝《舗道を行く》  
1934年 第6回青龍社展



(図5)

谷口富美枝《装ふ人々》1935年  
第7回青龍社展  
個人蔵



(図6)

谷口富美枝《海の憩ひ》《山の憩ひ》  
1936年 第7回青龍社展



(図7)

谷口富美枝《ものぐるひ》  
1936年 第4回春の青龍社展



(図 8)  
谷口富美枝《湖畔の聖母》  
1939年 第1回個展



(図 9)  
谷口富美枝《(五月) 新緑》  
1939年 第1回個展



(図 10)  
谷口富美枝《秋意》  
1940年 第2回個展



(図 11)  
谷口富美枝《山湖伝説》  
1940年 第2回個展



(図 12)  
ロサンゼルス高野山米国別院所蔵の谷口仙花の作品



(図 13)  
谷口富美枝《高原に展く》  
1937年 第9回青龍社展  
カンザス大学蔵

## [図版出典一覧]

- (図1) 呉市立美術館蔵
- (図2) 『塔影』第8巻9号 1932年9月
- (図3) 『近代日本アート・カタログ・コレクション 084 青龍社』第1巻, 2007年
- (図4) 『近代日本アート・カタログ・コレクション 084 青龍社』第1巻, 2007年
- (図5) 『美人画に見る風俗 昭和前期』目黒雅叙園美術館, 1996年
- (図6) 『近代日本アート・カタログ・コレクション 084 青龍社』第1巻
- (図7) 『美之國』第1巻6号 1936年5月
- (図8) 船田富士男氏所蔵
- (図9) 『阿々土』26号, 1939年6月, p.15.
- (図10) 呉市立美術館蔵
- (図11) 呉市立美術館蔵
- (図12) 高野山米国別院提供
- (図13) 『美人画に見る風俗 昭和前期』目黒雅叙園美術館, 1996年